

日系社会におけるエスニック・アイデンティティと エスニック・シンボル

—カナダ、バンクーバーを事例として—

佐藤 純子

1. 研究の目的と方法

本稿は、ブリティッシュ・コロンビア州（以下 BC とする）バンクーバーをフィールドに、日系カナダ人¹⁾のエスニック・アイデンティティの変容と、その現状について考察するものである。

本稿においては日系カナダ人たちを「エスニック集団」として扱う。筆者は、「エスニック集団の性質、エスニック集団としての特質を帯びている状態」を「エスニシティ」とし、そのエスニシティのうち「個人が自らをそのエスニック集団の一員であると見なす意識、エスニック集団の成員によって共有される同類意識」を「エスニック・アイデンティティ」として理解する。

エスニック・アイデンティティの性質について、それはホスト社会への文化的同化を超えて存続するものであり、その持続は伝統的エスニック文化維持の有無とは必ずしも関係がないと言われている（綾部，1985）。たとえ彼らが言語、文化、宗教等の客観的屬性を失った場合でも、集団の成員に共通の利害、目的、共有物などが存在すれば、それがエスニック・アイデンティティの保持機構となり、エスニック・アイデンティティは維持されていくのである。

本稿では、それらエスニック・アイデンティティ保持機構のうち、その集団独自のエスニシティが強く集約されている事象—「エスニック・アイデンティティ保持のために成員が共有しているモノや、新たに創り上げたモノ（出自民族の伝統的・文化的なものでなくてもよい）」—を「エスニック・シンボル」として捉える。

筆者は、このうち、人々の歴史的経験と結びついた空間、あるいは「場所」の持つシンボル性に注目し、バンクーバーにおいては、旧日本人街（パウエル街）がエスニック・シンボルではないかという仮説を立てた。

パウエル街（Powell Street）とは、ダウンタウ

ンの東に位置する、今はすっかり荒廃した旧日本人街である²⁾。現在そこには僅かな数の日系組織と商店が残っているだけで、浮浪者や低所得者が生活する閑散とした通りと化している。しかし、毎年行われる日系人祭は「パウエル祭」と呼ばれ、パウエル街を会場に行われている。従って、パウエル街という空間が、日系人のエスニック・アイデンティティを保持するうえで何らかの役割を果たしていると推測されるのである。

本稿では、日系人のエスニック・アイデンティティについての考察に加え、パウエル街のエスニック・シンボル性についても検証していく。

2. 日系社会の概要

今日、カナダにおける日系人口は約5万人である（第1表）。ここでいう日系人口とは、カナダの国勢調査における『Japanese ethnic or cultural origin』を持つ者の数であり citizenship や nationality は問題とされていない。よって、カナダ生まれの日系人のみではなく、戦後から今日までカナダへ渡航した日本人をも含んでいる。現在も毎年僅かではあるが、日本から移民が送り出されており、日系人人口は漸増傾向にある。

日系移民の歴史は19世紀末、カナダ西部 BC から始まった。日系人たちは第2次世界大戦までその人口の約95%が BC に集中していた。中でも日系移民の門戸となったのはバンクーバーである（新保，1975）。当時はガス・タウンと呼ばれる人口数百人の寂しい寒村であった（吉田，1993）。この頃、カナダ西海岸で都市らしい発展を遂げていたのは、バンクーバー島にある州都ビクトリアと旧 BC 植民地の首都ニュー・ウェストミンスターくらいであった（佐々木・下村，1994）。

しかし、当時進められていた大陸横断鉄道の建設が西海岸に飛躍的な発展をもたらすこととなる。1886年にはガス・タウンに市制が敷かれ、バンクーバーが誕生、翌87年には、バンクーバーを終

第1表 年次別地域別日系人分布

	B. C.	平原三州	オンタリオ州	ケベック州	アトランティック	準州	日経総数
1901	4,597	18	29	9	1	84	4,738
1911	8,587	309	35	12	4	74	9,021
1921	15,006	635	161	32	6	28	15,868
1931	22,205	817	220	43	4	53	23,342
1941	22,096	734	234	48	5	41	23,149
1951	7,196	4,722	8,581	1,137	19	35	21,663
1961	10,424	5,297	11,870	1,459	46	58	29,157
1971	13,585	6,110	15,600	1,743	160	55	37,260
1981	16,040	6,730	16,685	1,395	100	40	40,995
1991	20,850	6,995	18,505	1,860	290	75	48,595

*1991年度のものは、20%のサンプルデータより推計したものである
 出典：新保（1975, 1980, 1986）、カナダ国勢調査（1991）より作成

第2表 戦中・戦後の日系カナダ人分布

州名	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1951
B. C.	22,096	21,975	16,504	16,103	15,610	14,716	6,776	7,179
アルバータ	578	534	3,231	3,469	3,559	3,681	4,180	3,336
サスカチュワン	105	100	129	153	157	164	505	225
マニトバ	42	30	1,084	1,094	1,052	1,052	1,186	1,161
オンタリオ	234	132	1,650	2,424	2,914	3,742	6,616	8,581
ケベック	48	25	96	344	532	716	1,247	1,137
ユーコン&NWT	41	39	30	29	29	30	31	35
合計	23,149	22,837	22,725	23,617	23,854	24,112	20,558	21,663

*ニュー・ブランズウィック、PEI、ノヴァ・スコシア、ニュー・ファンドランド州についてはデータが一桁であるため省略する

出典：Kobayashi, Audrey. (1989) : "A Demographic Profile of Japanese Canadians" Department of the Secretary of State. ミキ・コバヤシ (1995) より引用

点とするカナダ太平洋鉄道が完成した（吉田, 1993）。新都の人口は4,000人を超え、日系人も20名ほど居住していた（佐々木, 1994）。以来、バンクーバーは商業地と交通の要として急成長していく。20年後の1907年には人口75,000人以上の大都会となり日系人口も1,700人を越えるようになった（佐々木・下村, 1994）。バンクーバーは太平洋に面していることもあって、国内だけでなくアジアとの交易地としても急速に発展していった。現在は人口約160万人、多くの移民を抱え、エスニックの色彩豊かな大都市となっている。

20世紀に入ると、日系人たちはバンクーバー市内の一画に集住し、日本人街を形成し始める（新保, 1986）。次第に商店の数も増え、日系社会の

中心地として発展していくが、第2次世界大戦時の強制移動によって日系人たちはバンクーバーを追われ、日本人街は解体してしまった（佐々木・下村, 1994）。

強制移動によって、日系人の多くは戦中、平原州、オンタリオ州等の収容所で暮らすこととなった。戦後も東部に残ったものが多く、以来日系人人口の分布が一変した（ミキ・コバヤシ, 1995）。第2表を見ると、1947年にはBCにおける日系人人口は半減し、代わってアルバータ、オンタリオ、ケベック等の東部諸州で増加しているのが分かる。20世紀前半までBCに集中していた日系人人口がカナダ全土に分散していったのである。

戦後、日系人達は各地で生活の再建を始め、約20

年で安定を取り戻した。彼らは、適正な職場と待遇が与えられるようになると都市部での生活を志向するようになり、70年代から90年代にかけて都市部（特にバンクーバー、トロント）での日系人口は急増している。しかし、日本人街は解体してしまったので、日系人集住地域といったものはなく、居住は分散している（第1図）。

現在バンクーバー、トロントの2都市は、日系人たちにとって、コミュニティネットワークの発信地として機能している。そこには日系社会全体を支持する包括的組織をはじめ数多くの日系団体が結成され、三世が中心となったコミュニティ活動が行われている。

なお日系社会の歴史については、文献を参考に年表（第3表）を作成した。

3. 日系人のエスニック・アイデンティティ³⁾

(1) 日系社会におけるエスニック・アイデンティティの変容

本節では、前章で見てきた日系社会の歴史の変遷とのかかわりにおいて、各時代ごとに彼らのアイデンティティがどのように変化していったのか考察していくことにする。

1877～1907年頃までの日系人は出稼ぎ労働者であり、彼らにはカナダ人になりきり、カナダで一生を終えるという考えはなかった。日系人たちは言語、生活習慣ゆえに寄り添って暮らし、カナダ社会に馴染もうとしなかった。また、一稼ぎして「故郷に錦を飾る」という思いが強かったため（新保，1980，p.182；吉田，1993），故郷（日本）への帰属意識は非常に強かったと思われる。

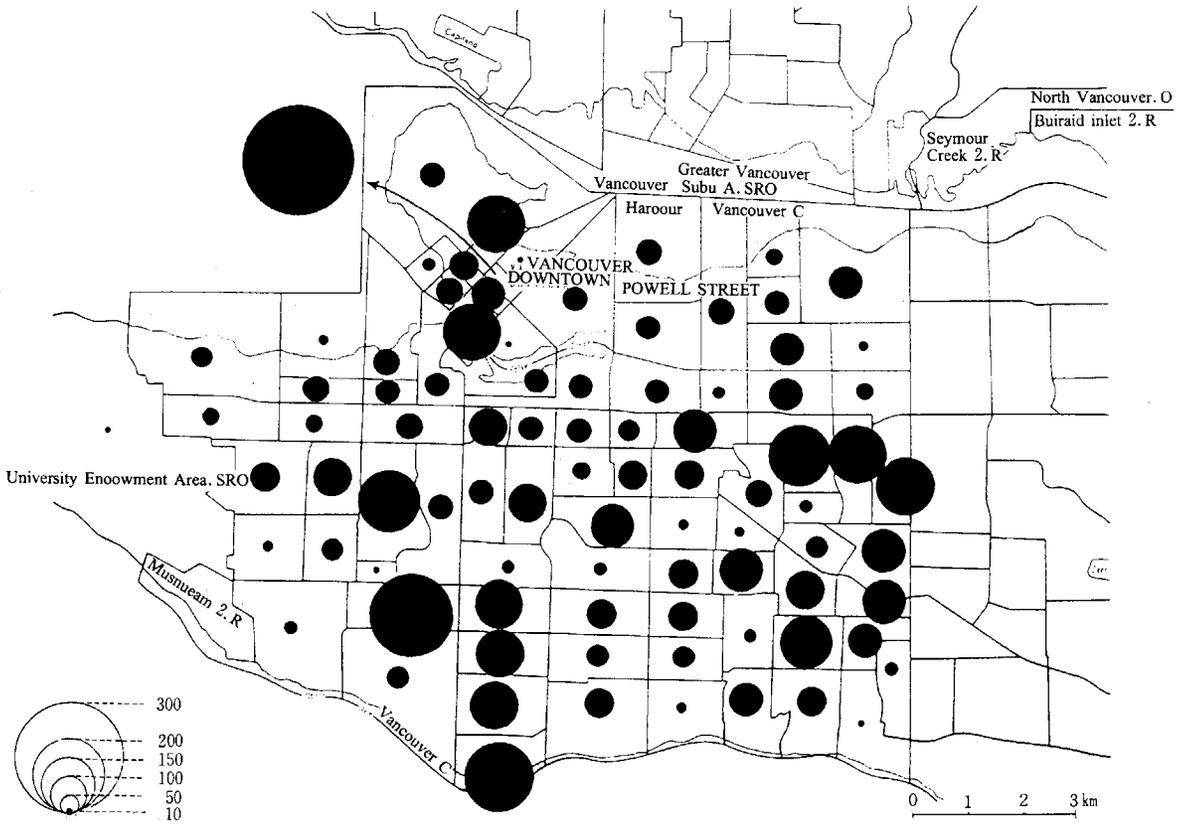
日系人たちは、排斥を受け、二等市民としての扱いにも耐えながら故郷の家族のために必死で働いていた。その支えとなったのが「大和魂」であったという。オマツ（1994，p.67）は「一世たちは大和魂をお守りのように大切に保持し、困難に直面した時はいつも呪文のように唱えていた」と述べている。またAdachi（1976）で描写されているバンクーバー暴動時の日系人たちの反逆の様子“*They sallied forth with sticks, clubs, iron bars, knives, and bottles. Crying “BAN-ZAI” they tore*

into the mob.”にも「大和魂」の表出を垣間見ることができる。この「大和魂」に「日本人」としてのアイデンティティが凝縮されていたと言えるだろう。

レミュー協定が結ばれ、日系社会に永住志向が定着しつつあった20世紀初頭は日系人がカナダ社会へ入り込む過渡期ということができる。一世は配偶者を得、家族を形成していった。一世は、二世の教育に非常に熱心であり、子供たちに日本的道徳観や伝統文化を教え込もうとしていた（門田，1996）。しかし、白人とともに学び、カナダ的価値観を身につけていた二世にとってそれは受け入れ難いものであった。排斥に喘ぐ親たちの姿を見て育った彼らは、エスニシティがホスト社会で生きていく上で障害となることを知っていたのである。彼らは強い同化志向を持っていた。このような価値観の差に言語の障壁が加わって、親子にすれ違いが起こっていった。二世は、家庭と白人社会（学校）という二つの異なる環境におかれ、二つのアイデンティティの狭間で揺れ動いていたと思われる。

戦争勃発によって、日系人たちは故郷 BC を追われ内陸部へ強制移動させられた。戦争を経験した日系人たちには今でも生々しくその記憶が残っているという。それほど衝撃的な出来事だったのだ。二つの母国が敵国どうしとなることは日系人にとってまさに悲劇であった。自分は何者のために戦うのか……。この時彼らのアイデンティティは「日本人」か「カナダ人」かはっきりと分かれることになった。

多くの二世はカナダ人として戦う覚悟を決めていた。BCの軍隊で通訳として働いたBarryは、その著書（Barry, 1977）の中で、“*I joined up because I wanted to. By the rights, by the way they we'd been treated, maybe I should have told them to go to hell.*”と述べている。彼らは、自分たちがいかに差別されてもカナダ人であると自負していた。国のために戦うことで「カナダ人」としての自分たちの権利を認めさせたかったのである。しかしカナダ政府は日系人を日本人と同一視し、彼らのカナダへの忠誠にもかかわらず、敵と見なしたのである。これは、彼らの「カナダ人」としてのアイデンティティを否定されたことに他ならない。この二世の悲しみ、屈辱は後々まで拭えないものと



第1図 バンクーバー市内エリア別日系人口分布

*ここではJapanese single ethnic originとして集計された日系人口のデータを用いる。ethnic originとは、本人の両親が属するエスニック・グループを調査したものであり、このsingle ethnic originとは一つのエスニック・グループのみ(この場合、Japaneseというethnic originのみ)を回答した者の統計である。2つ以上のエスニック・グループを答えた場合は、multiple ethnic originとして別に集計されている。

*パウエル街の位置は地図上のPOWELL STREETで示した一帯

*バンクーバー市の東側がバーナビー市、北がノース・バンクーバー市

出典：1991 Census of Canada (Census Metropolitan Area)

The Geography Division, Statistics Canadaより作成

なった。二世の中には、この政府の対応に失望し、憎しみを抱いて強く反発した者もいた。

一世はというと、多くは日本への愛国心からカナダ政府への服従を拒否した。中でも政府に強く抵抗した者は「ガンバリヤ」と呼ばれ、トラブル・メーカーとして捕虜キャンプに収容された。その一人であるYさん⁴⁾は、「戦争が終わって日本

に帰った時、『戦争中カナダでどんな事をしていたか』と聞かれて『カナダの為にキャンプで働いていた』などと答えられないと思い、労働キャンプへ行くのを拒否した」という。彼は戦争という逆境においても「大和魂」を持ち続け、カナダ政府に抵抗するという行為で日本を支援していたのだった。

第3表 日系社会の形成史

<p>出稼ぎ移民期</p>	<p>1877 最初の日系移民、永野萬蔵ニューウェストミンスターへ上陸→鮭漁へ従事 1886 ガスタウンがバンクーバー市へ 1887 カナダ太平洋鉄道が完成 (90s)本格的に日系移民の渡航が始まる 主に漁業・製材業・農業・炭鉱労働に従事 バンクーバー市内には20箇所もの製材所→ヘーシング製材所に多くの日系人労働者 周辺のパウエル街に日本人向けの下宿や日系 商店が出来はじめる=日本人街形成 中国人・インド人移民の流入増→反東洋人感情の高まり</p>
<p>永住志向と家族形成期</p>	<p>1906 「日本国民学校」創立 1907 日系移民の急増、排日感情の激化→「バンクーバー暴動」=日本人街・中国人街襲撃 1908 レミュー協定締結→日系労働移民年間400人に制限 (10s)永住志向の定着、家族の呼び寄せ 写真婚のはじまり→女性渡航者の急増 (20s)家族形成、二世の誕生 日本式教育からカナダ式教育へと教育方針転換 日本人街の発展、日系社会最盛期 (30s)二世人口が一世人口を上回る 日本語学校40余校に増加</p>
<p>戦争による強制移動とコミュニティ崩壊期</p>	<p>1941 第2次大戦により日本とカナダが戦争状態に入り、排日がクライマックスに達する ↓ 邦字新聞、日本語学校の閉鎖 日系労働者の解雇、漁業禁止 新聞に排日記事の掲載 巷で日系人の総移動を要求する声が高まる 西海岸の沿岸部から100マイルの防衛地帯には日系人の立ち入り禁止 1942 18歳から45歳までの日本国籍男子、道路キャンプ徴用計画 日系人総移動令 日系コミュニティの崩壊 ↓ 内陸収容所、砂糖大根農場、道路キャンプ、捕虜キャンプなどへ移動 1943 日系人の財産・事業・家屋等が所有者の許可なしに強制処分される 「再移住」・「本国送還」計画 「忠誠心調査」 ↓ 日系人は日本へ帰国するか、ロッキーの東側へ分散居住 1946 平原州、オンタリオ州などの郊外へ再定住、生活再建</p>
<p>同化と生活再建期</p>	<p>戦時中の日系人への不当な扱いに対する補償（リドレス）運動が起ころはじめる 1949 日系人のBC州への帰還が認められる 1950 低い補償額によりリドレス問題がうやむやに→リドレス運動一時中断 (50s)日系人たちの散住、カナダへの同化志向 (60s)世界各地でエスニシティをめぐる主張の台頭=ケベックでも州の分離・独立運動が盛んに 政府が「二言語・二文化主義」を打ち出す→他のエスニック・マイノリティの反感 ↓ 1971 「二言語・多文化主義」 日系人も社会的制約から解放→各分野への進出 二世による家族形成、三世の誕生</p>
<p>日系社会再興期</p>	<p>1977 日系移民百周年→各地で百周年祭、各種イベント ↓ 日系人歴史写真展が若者（三世）の関心を集める 日系人たちの間にエスニック・アイデンティティ確立の動き (70s)日系社会の中にリドレス運動が復活 コミュニティの活性化 1984 NAJCによるリドレス問題の本格的交渉開始 1988 リドレス合意→個人補償\$21,000,000、戦時中罪に問われた日系人子孫の名誉回復、市民権を剥奪された日系人子孫へのカナダ市民権授与</p>

多くの一世代は、Yさんのように「日本人」であることをやめなかった。帰化すれば日本人で無くなるとして帰化しない一世代が多かったのもそのためであろう。彼らの多くは本国帰還の道を選んだ。しかし日本の敗戦を知った途端態度を変え、日本行きをキャンセルした一世もいたという (Barry, 1977)。このような一世たちを、二世のBarryは軽蔑している。アイデンティティの屈折という苦悩を味わった二世には、一世の一瞬の心変わりが許せなかったのだろう。

祖国カナダに敵視され、外国人として疎外された二世にとって戦争体験の傷痕は相当深かった。二世によって書かれたエッセイ (門田, 1996) に、自分たちは「失われた世代」であるという表現があった。政府が日系人に対して行った行為は、彼らの、政府に対する信念や民主主義への望みを断ち切り、自尊心・アイデンティティまでも喪失させることになってしまったのだった (門田, 1996)。成長期・青年期にあった彼らにとって、そのダメージはあまりに大きく、年老いた今になっても精神的喪失感は拭えていないようである。

日本が敗戦すると、日系社会にくカナダ人として生きていこうという気運が高まっていった。戦争経験によって、カナダ政府に従って生きることこそ賢い生き方であると身に沁みて感じていたからであろう。一世は日本への思いを断ち切ってカナダでの再出発を決心し、二世は二度と祖国に疎外されぬよう良きカナダ人になろうと努めた (門田, 1996)。彼らは、白人に追いつき追い越そうという野心を抱き、懸命に働いたのだった (吉田, 1993)。生活再建に追われていた日系人にとって、コミュニティを形成することは二の次であり、そこにはもはや強固なコミュニティは見られなかった。「日系人」としてのアイデンティティも、心の奥底へしまわれてしまったかのようであった。

日本からの移民が再開されると、新たなメンバーが日系社会に加わるようになった。しかし、日系二世・三世たちは新移民に関心を示さず、融合しようとはしなかった。彼らは、自分たちの屈辱や悲しみを共有しない新移民たちとは分かり合えないと感じていたのではないだろうか。一方、新移民たちも、高度成長社会からやってきたというエリート意識のようなものを持っており、カナ

ダで育った日系人たちと一緒にされたくなかったようである。彼らは日系社会には関心を示さず、初めからカナダ社会への同化を望んでいた。両者はお互いにアイデンティファイしていなかったのである (新保, 1980)。

ここまで見てくると、日系人の持つアイデンティティには世代差があるということが明らかになってくる。

概して、一世は一貫して「日本人」というアイデンティティを持ち続け、カナダの生活習慣に同化しても、日本人精神、価値観は保持し続けた。戦争を体験した一世は〈自分たちと同じような辛い思いはさせたくない〉と子女の同化を奨励するようになり、辛い過去はそのまま忘れるほうが良いと、孫の世代に戦中の体験を語り伝えることはしなかったのだった。

二世は、ほぼ普遍的と言えようような特有の問題—「家庭環境からエスニシティの影響を強く受ける一方、幼いころからホスト社会の文化・機会に接していることでエスニック集団を放棄しようとする動機が生まれ、これらの相反する社会的圧力を解決しなければならぬ心理的葛藤を生むこと」(Child, 1943)—に加え、祖国からの疎外という試練をも乗り越えなければならなかった。複雑な思いが二世を支配し、彼らはアイデンティティを確立できずにいたのである。それが戦後公的差別がなくなり、日系社会全体に同化思考が根づくようになると苦悩から解放され、それまで抱きつづけていた祖国への憧憬が反動となって「カナダ人」としてのアイデンティティを強く持つようになった。

三世は、二世と異なり、親の世代との対立もなくエスニック集団から逃避する必要はなかった。彼らは「日系人」というエスニシティの影響をそれほど受けずに育ち、それ故「カナダ人」としての国家に対するアイデンティティを持ちつつも、好奇心やプライドから自分たちのルーツへの関心を高めるようになった。1977年、日系移民百年祭が行われると、その関心は一気に高まっていく。さらに、彼らが成長期にあった60~70年代は世界中でエスニック集団の存在とその主張が顕在化してきた時期である。こうした時代の流れに影響され、他のエスニック集団と同様、日系三世もエスニック・アイデンティティを模索し始めたので

あった。その結果、「カナダ人」としてのアイデンティティと「日系人」としてのエスニック・アイデンティティの二重のアイデンティティを持つようになった。

三世のエスニック・アイデンティティは「リドレス（補償）運動」にぶつけられた。戦争を体験した一世や二世が、「戦時中の傷痕はどうにも癒されるものではない」として政府の謝罪と団体補償があれば十分と消極的であったのに対し、三世や若い二世たちは、日系人個々の名誉回復と人格補償を掲げ、勝利を勝ち取るために積極的に運動を進めていったのである。一世・二世のく昔の辛い記憶は忘れたい、過去を引きずり出して事を荒立てるような真似はやめたほうがよい」という態度、そして三世たち若い世代のくたとえ済んだことであってもその過ちは正すべきである、人権問題という国家の問題として捉えなければならない」という態度には、戦争を経験した者としていない者とのエスニック・アイデンティティのギャップ、また、それぞれの日本的・カナダの価値観が象徴されていると言えよう。

このように、リドレス運動に対する姿勢は各世代で異なるが、一つの問題に取り組むことによって彼らの団結は高まっていった。この時期、エスニック・アイデンティティの認識に世代差を含みつつも、コミュニティ全体に「日系人」というエスニック・アイデンティティが確立されていったと言えるのではないだろうか。

(2) 現在の日系人のエスニック・アイデンティティ

現在はリドレス合意から8年経っており、その高揚もおさまりつつあるように思える。本節では、現在の日系社会において個々の日系人がどのような

アイデンティティを持っているのか考察していきたい。

主な資料は、筆者がバンクーバーの日系人に対して実施したアンケート調査である。1996年2月に行い、配付した150部のアンケートのうち74部を回収した。サンプルは、10～20代は日本語学校の生徒、UBC 日加交流会⁵⁾のメンバー、30～50代は日本語学校の生徒の父兄、JCNM&AS⁶⁾のスタッフ、60～70代は「隣組」⁷⁾へ通っているお年寄りを対象として設定した。しかし、思うように回収できず結果的には偏りが出てしまった。30～50代の各世代のサンプルは僅少であったので、それは一括して集計することにした。回答者の世代・年齢の内訳は第4表の通りである。

第5表はアンケートの回答より、それぞれ年齢別、世代別にまとめた日系人のアイデンティティである。表に示してあるJ, J-C, C-J, Cはそれぞれ「日本人」、「日本人に近い日系人」、「カナダ人に近い日系人」、「カナダ人」というアイデンティティを示す。日系社会全体で見ると、約7割の人々がJ-C, C-Jというアイデンティティを持っていることから、意識の程度に差はあれ、全般に「日系人」というアイデンティティが保持されていると考えられる。

次に日系人がコミュニティに対してどのような意識を持っているのか見てみよう。まず日系社会は存在すると思うかについて「存在する」が50%、「しない」が20%で、残りは無回答である。「存在する」と答えている者のうち「健在する」が9%「分散している」が13%「弱くなっている」が28%であった（第6表）。彼らの多くは日系社会の存在を肯定してはいるものの、居住地の分散や民族外婚の増加のために、それは弱くまとまりのないものになったと感じているようだ。コミュニ

第4表 アンケート回答者内訳

	10代	20代	30～50代	60代	70代	計
一世	7	1	1	0	0	9
二世	28	3	1	8	3	43
三世	4	2	4	1	0	11
四世	2	3	0	0	0	5
不明	5	0	0	1	0	6
計	46	9	6	10	3	74

第5表 年齢別・世帯別にみた日系人のアイデンティティ

(a) 年齢別

	J	J-C	C-J	C	その他	計
10代	5	20	14	2	5	46
20代	0	3	3	3	0	9
30~50代	1	1	3	1	0	6
60代	0	2	7	1	0	10
70代	0	2	0	1	0	3
計	6	28	27	8	5	74

(b) 世代別

	J	J-C	C-J	C	その他	計
一世	2	4	2	0	1	9
二世	3	21	13	4	2	43
三世	0	1	6	2	2	11
四世	0	2	1	2	0	5
不明	1	0	5	0	0	6
計	6	28	27	8	5	74

第6表 日系社会の存在の有無

日系社会は存在しない	15	
日系社会は存在する	健在する	7
	分散している	10
	弱くなってきた	21
分からない	1	
無回答	20	

【個別回答】

- ・家庭が最も強い日系社会であるので、親が伝えていかなければ日系社会は消えていってしまう。
- ・日系社会の存在は感じるが、フィリピン人や中国人など他移民と比べ弱い。
- ・沢山の異なる組織やサークルは存在するがただ一緒に集まっているだけで団結がない。
- ・多民族との結婚や周辺への移住のため、日系社会は弱くなってきた。
- ・日系社会は存在すると思うが、多くの日系人はそれと接触がない。恐らく日系人が分散してしまったことと、日系人の諸活動に積極的に参加していないためであろう。
- ・< 排斥され続けた過去 > という類似した経験から、同世代のアジア系カナディアンに対してアイデンティファイすることがある。最近の新移民と自分はなんの共感もなくアイデンティファイしない。
- ・日系組織や日本語学校、仏教会に参加することで日系社会とアイデンティファイする。
- ・最近の日本は急速に変化していて、初期の日本人がカナダに移民してきたころの日本と違いすぎる。だから新移民や日本人滞在者とはアイデンティファイできない。

ティの存在が不明確なために、日系社会の中心はどこか、という質問についても「分からない」・「無回答」が多かった(第7表)。また、「日系人は既にカナダに同化しているのであって新移民だけがコミュニティをつくっている」「新移民とは同一視しない」などという回答が見られ、新移民とそれ以外の日系人(戦前移民とその子孫)がうまく融合していないことが分かった。つまり両者がそれぞれ自分たちを「日系人」と規定していても、それは同一のエスニック・アイデンティティに帰していないということである。

以上から①今日、日系社会全般に「日系人」というエスニック・アイデンティティが保持されているが、その認識は世代交代に伴って弱まる傾向にあること、②最近の新移民とそれ以外の日系人がお互いに同一視していないこと、③「日系社会」は分散もしくは弱体化し、日系人にとってその存在が不明確になってきていること、などが指摘される。

普通こうしたエスニック・アイデンティティは、エスニシティ、つまり言語や宗教、生活習慣、伝統文化などによって保持されていくものであるが、これらの客観的的属性を失いつつある日系人たちは、現在どの様にしてそのエスニック・アイデンティ

第7表 日系社会の中心

バンクーバー市	19
スティブストン (リッチモンド市)	9
パウエルストリートの辺り (日本語学校や隣組)	4
JCCA や隣組, 教会などの日系組織	1
バンクーバー・ダウンタウン	2
分散している	3
存在しない	10
分からない	3
無回答	23

【個別回答】

- ・歴史上日系社会の中心はJCCAだった。かつて強いサポートがあり、コミュニティの力が強かったが、今は弱くなってしまった。
- ・日系社会の中心は存在しない。日本人は本来帰属意識が強いはずなのに今はそれがなくなった。一世は強い団結を保っていたのに、二世からはバラバラになってしまいパイオニアスピリットもなくなってしまった。

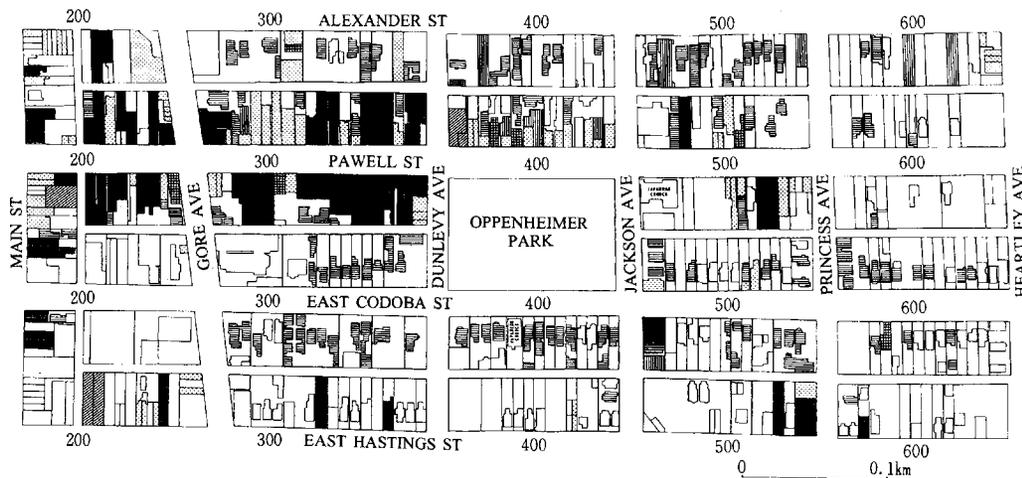
ティを保持しているのであろうか。北川 (1986) は、カナダの日系社会においては三世が中心となり、日系文化、コミュニティ活動などの「エスニック・シンボル」を掲げることで、エスニック・アイデンティティを保持していると述べている。そこで、バンクーバーの日系社会にとってのエスニック・シンボルとはどのようなものであるのか、それを次章にて考察してみたい。

4. 日系社会におけるエスニック・シンボル

(1) 戦前 (1927年) のパウエル街

まず、第1章にて示したパウエル街のエスニック・シンボル性を検証するために、パウエル街の様子を把握する必要がある。そこで戦前のパウエル街を再現してみた。

第2図は、1927年の日本人街中心部 (東西はメインストリート～ハートレイアベニュー、南北はアレキサンダーストリートからイースト・ヘイス



第2図 戦前 (1927) のパウエル街

出典：“Fire Insurance Plans” (1930)

“WRIGLEY’S BRITISH COLUMBIA DIRECTORY” (1927)

- 1階がOffice, Shop, Restaurant, 2階がRooms, Apartment, Boarding house
- ▨ 1階がOffice, Shop, Restaurant, 2階がhouse
- ▧ Rooms, Apartment, Boarding house
- ▩ House
- ▤ Office, Shop, Restaurant
- ▥ Hotel

ディングスストリートとした)の再現地図である⁸⁾。

資料としたものは、1927年から30年にかけて作られた“Fire insurance map”と呼ばれる地図と、1927年度のバンクーバー市編住所録“WRIGLEY'S BRITISH COLUMBIA DIRECTORY”(VANCOUVER CITY ARCHIVES LIBRARY, 1927)である。地図は GUARANTEE ADVISORY ORGANISATION が制作した“Fire insurance plans”の図であり、建物一つ一つの種類(民家・商店等の別)が記入してあるので、日本人街にどのような建物があったのか知るには便利である。住所録は、個々の建物が日系のものかどうか判断するために用いた⁹⁾。

当時のパウエル街の特徴は以下の通りである。

①日本人街はパウエルストリートが目抜き通りとなっており、その300~600番地に商店やレストランが集中している。②全般に建物の造りは、一階が商店やオフィスで二階が住居やアパートというパターンが多い。③海側(アレキサンダーストリート側)にはルーミングハウス(下宿)やアパートが多く、市内側に行くに従って民家が増えている。④メインストリートやイースト・ヘイスティングスストリートの辺りは中国人街と接触している所で、中国系と日系の建物が混在している地域である。

当時、パウエル街では、どのような商売が営まれていたのだろうか。

伊藤によると「パウエル街には教会3、新聞・雑誌社4、印刷所1、書店4、金融機関2、歯科を含む医院7、薬局4、産婆6、通弁・代筆11、時計屋4、写真館6、旅館・下宿57、美術・雑貨・グロッサリー42、蓄音機店3、金物屋2、洋服店16、ダイオーク・洗濯屋8、精米所6、運送店13、造船所2、靴屋10、球場12、理髪店41、果物・菓子店29、洋食店2、日本料理店14、あんま3、自動車屋3、豆腐屋4、魚屋3、カマボコ店1、牛乳配達3、その他ブリキ屋、大工看板店などがあった¹⁰⁾という(伊藤(1969); 引用は吉田, 1993 pp. 208-209による)。

また、実際パウエル街で日本料亭を営んでいた一世の森田(1986 pp. 141-152)によれば「パウエルの二百番台から六百番台までは、一階が日系店舗、二・三階がホテルや貸部屋という建物が連

なっていて、いずれも日系人が取り仕切っていた。例外は黒人の靴磨き屋と中国人の経営する料理屋の二軒だけで、カドバ街も東三百番台から七百番台まで、教会を除いて殆どが日系人の住宅となっていた。(中略)飲食店は日本食専門店が十五軒、中華料理屋が三軒、床屋は十五軒以上、銭湯も五軒ほどあった。当時はパウエル街で全て用事が足りたから、通りはいつも日系人で賑わっており、朝早くから夜遅くまで日本語の会話が流れ、裏通りからは、おから、油揚げ、かまぼこの匂いが漂ってきた」とあり、その様子は生活の匂い漂う下町といったところである。

しかしパウエル街には違う一面もあった。森田(1986)の「日本人が遊ぶ場所としては『紅葉倶楽部』『東洋倶楽部』『新谷玉場』の三つの玉突き場があった。いずれも奥の一室にはゲームテーブルが置かれていてポーカーやブラック・ジャックなどが終日行われていた」という描写や、吉田(1993 p. 209)の「チャイナタウンの遊廓が閉鎖されたあと、パウエルストリートの一本奥のアレキサンダーストリートが赤線区域となり、白人女性までも入り込んでいた。日本人の経営するバクチ場もあり、日本人漁夫相手のバクチは派手であった」という記述からは、当時のパウエル街が住居・商業地区的性質だけでなく、歓楽街的性質も持っていたことがうかがえる。

一方、今日のパウエル街は戦前とは一変し、すっかり荒廃してしまっている。第8表は、同じくバンクーバー市編の住所録によって1994年度のパウエル街の建物の内訳を集計したものであるが、これによれば日系の建物¹¹⁾は14軒しか存在しない。もはや日本人街とは呼べないのは明らかである。

第8表 パウエル街の建物の内訳(1994)

	建物数		建物数
民家	46	コミュニティ施設	7
アパート・下宿	38	ホテル	11
ビジネス	112	日系施設	14
公営施設	12	空家	58
宗教施設	13	不明	17

日系建物の内訳・・・商店(5)、レストラン(5)、コミュニティ施設(4)

出典：WRIGLEY'S BRITISH COLUMBIA DIRECTORY (1994)より作成

実際パウエル街を歩いてみても、空き家や空きビルが目につき閑散としている。通りには浮浪者が多く、昼間でも一人で歩くのは心細い。現地の人のお話では、「夜になると麻薬中毒者が徘徊するようなところだから絶対に行ってはならない」ということであった。

(2) パウエル街のシンボル性

パウエル街がエスニック・シンボルであると言うためには、それが日系人たちのエスニック・アイデンティティを喚起する特別な空間として認識されていなければならない。そこで、アンケートから日系人がパウエル街に対してどの様な感覚を持っているのか見てみることにしよう。

アンケートで、パウエル街の歴史をどの位知っているか尋ねたところ第9表のようになった。戦前の日系社会を生きた二世（現在、60代・70代）は当時のパウエル街に詳しく、「親や親戚が住んでいた」「日本語学校へ通っていた」という回答が目立ったが、戦後生まれた日系人については、パウエル街について本を読んだり、親に聞いたりしてその歴史を良く知っている者はそれほど多くない。若者・特に新移民には、パウエル街がかつて日本人街であったという事実はあまり知られていないようである。

また、パウエル街に対する関心について見てみると、特に若者の関心が低く、全体でも約3割の者が「パウエル街に関心がある」と答えているにすぎない（第10表）。一方、「関心がある」と答えている60～70代の二世は、「現在のパウエル街ではなく、昔のパウエル街に関心がある」「隣組に関心がある」などとしており、かつての日本人街という場所や、たまり場的〈日系施設〉に対する愛着を強く持っている。これらより、エスニック・アイデンティティ同様、パウエル街に対する認識にも世代差があると言えそうだ。

また、年配者のパウエル街への愛着は、「チャイナタウンは現在も原型をとどめており、その存在は誰の目にも明らかであるが、パウエル街はすっかり変容してしまっており、そこに日本人街があったという記憶は消されようとしている。それを次世代の日系社会に引き継ぐためにもパウエル・グラウンドを旧日本人街として designate（明示）し、何らかの形に残そう」と呼びかけている

第9表 パウエル街の歴史に関する知識

詳しく知っている (本を読んだ／親からきいた／住んでいた)	18
少し知っている／聞いたことがある	14
全く知らない／あまり知らない	36
無回答	6

【個別回答】

- ・WW II前に日本人街にオフィスや商店、学校があり、日本人社会の中心だった。多くの日本人が日本語学校に通っていた。
- ・戦前は日本人社会の中心だったが戦争のため強制移動しなければならず、パウエル街の財産は処理してしまった。
- ・1930～1942年まで日本人社会の中心で日本人が8000人程住んでいた。
- ・パウエルグラウンドで野球が盛んだった。
- ・親が住んでいた。(60代二世)
- ・1925～42年までのことは住んでいたのだから良く知っている。それ以前のことは父親(1940年渡加)が話してくれた。(70代二世)
- ・大学時代パウエルストリートにあった寮で2年間生活をした。その時初めて日本の生活習慣を経験した。(70代二世)

第10表 パウエル街への関心度
(a) 年齢別

	関心ある	ない	無回答	合計
10代	9	32	5	46
20代	3	6	0	9
30～50代	4	2	0	6
60代	4	6	0	10
70代	2	1	0	3
計	22	47	5	74

(b) 世代別

	関心ある	ない	無回答	合計
一世	2	6	1	9
二世	15	25	3	43
三世	3	8	0	11
四世	1	4	0	5
不明	1	4	1	6
計	22	47	5	74

二世がいることから伺える。彼がパウエル・グラウンドにこだわるわけは、かつてそこが、日系人の誇りであった『朝日野球チーム』の英雄たちが白人と戦い、活躍した場所であるからと言う。

このように見てくると、戦前、そこで生活していた二世にとって、パウエル街は〈心象風景〉としての意味を持ち、エスニック・シンボルであると考えられる。またそこに現存する〈日系施設〉自体にもエスニック・シンボル性が見いだされるように思われる。一方、戦前の日本人街を知らない若い世代にとっては、その空間は旧日本人街と

しては意識されず、エスニック・シンボルとしての意味を持たないと言えるだろう。

(3) パウエル祭の意義

ここで、パウエル街のシンボル性に関連させて、そこで行われる日系人祭の意義について考察してみたい。パウエル祭は移民百周年をきっかけに始まった日系人祭で、毎年夏に行われている。それは市民的行事のチャイニーズ・フェスティバル等とは違い、日系社会内で行われる小規模なものである（学園祭の雰囲気似ている）。祭りの宣伝

第11表 第19回パウエル祭プログラム

<p>1. ステージ催し物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スピーチ（長崎平和推進協会 50周年式典） ・平和式典（広島・長崎ライブ） ・朗読（千羽鶴） <p>2. 音楽とダンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽（ゲイズ／ナンバーワン・サン／さくらシンガーズ） ・踊り（隣組・シニアー） ・日本舞踊（音羽流／西川流／睦会） ・太鼓（ちび太鼓／さわぎ太鼓／うずめ太鼓／かたり太鼓） <p>3. 演劇</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コメディ（およよシスターズ） ・演劇（NWAA／檸檬座／「ワーホリの唄」／座だ いこん／「おゆきの子守歌」） <p>4. ビデオ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ラスト・ハーベスト」 ・「ポイント、ウィー・アー・ノット・エイリアンズ」 ・「フォー・ショート・ストーリーズ」 ・「クラウズ」 <p>5. 子供向けイベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・折り紙 ・燈籠の装飾 ・フェイス・ペインティング ・かぶとの製作 ・おみこしの装飾 ・日本語教育センター・天理教 …ダンス、音楽 ・子供パレード ・綱引き ・スイカ割り ・大声大会 ・日本語学校生徒による踊り <p>6. 観客が参加できるイベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おみこし ・祭り踊り ・相撲大会 ・花札 ・ラジオ体操 	<ul style="list-style-type: none"> ・パウエル街の歴史（徒歩） ・折り鶴 ・JCコミュニティの研究と討論会 <p>7. デモンストレーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・茶道（裏千家） ・居合道（止水会カナダ） ・空手（糸東流せいこう会空手道） ・剣道（錬武道場） ・少林寺拳法 ・柔道（西氣道館） <p>8. 展示・スライド</p> <ul style="list-style-type: none"> ・盆栽 ・生け花 ・墨絵 ・書道 ・パネル展（日系カナダ人の昔の写真） ・アーティストの作品紹介 <p>9. 販売</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉄板焼き、綿菓子、ジュース、お茶（バーナビー錬武道場） ・野菜（グレーターバンクーバーJCCA） ・照り焼き、（チキン、ビーフ、ポーク、野菜） ・すし、かき氷（十五夜すし・デリ） ・今川焼き、まんじゅう、飲み物（金光教バンクーバー教会） ・タコ焼き（西川流） ・イカ焼き、ジュース（桜荘） ・バーベキュー照り焼きサーモン（天理教よりもと会） ・おにぎり、サーモン弁当、白玉ぜんざい、（隣組） ・とうもろこし、寿司（手巻き、いなり）カレー、まんじゅう、飲み物（バンクーバー仏教会） ・ぎょうざ、まんじゅう（バンクーバー日系カナディアン青年会） ・照り焼き（チキン、リブ）、かき氷、グリコ製品（バンクーバー日本語学校） ・その他工芸品 ・宝くじ
--	---

も、日系コミュニティ紙や日系団体の機関紙に載る程度で、一般市民にはあまり知られていない。主催者は“Powell Street Festival Society”であり、その実行委員は毎年日系諸組織から選ばれているようだ。祭りには具体的スローガンは掲げられていないが、その主旨は「終戦を記念し平和祈願するとともに、日系人の交流の場を持ちコミュニティの存続を祝う」ことであると思われる。

第11表は、筆者自身も参加した1995年8月5・6日（第19回）のパウエル祭のプログラムである¹²⁾。終戦50周年にあたるこの年、特別イベントとして、長崎から講演者を招いての平和記念式典が行われた。毎年恒例のメインイベントは、日系諸サークルが披露する日本舞踊や太鼓、演劇等の出し物、華道、盆栽、墨絵、書道の作品展示、歴史写真展等であり、これは出演、出展する日系団体（個人）にとって、コミュニティ活動の張り合いになっているようだ。また、観客としてやってきた一般の日系人が参加できる神輿かつぎや祭り踊り、相撲大会といった企画も多数催され、日系人同士の交流が図られている。常設テントでは、手作りの工芸品や日本食が販売されており、人気のフードコーナーには常時人の列ができていた。中には、日本食を目当てにやってくるカナダ人（白人や中国人）の姿も多く見られる。さらに、会場の一角には、まもなく着工の日系コミュニティ施設に関するインフォメーションテントが設けられ、施設の模型展示や概要説明、募金の呼びかけ等が行われていた。

筆者は「隣組」のフードコーナーで日本食の販売を手伝っていたが、「隣組」にボランティアとして手伝いに来ていた日系人の中には、日系サークルや組織に所属していない者もいた。彼らは日常的に日系社会との接触がないため、パウエル祭という一大イベントに参加することでコミュニティとのつながりを維持しようとしているように思われた。パウエル祭には、普段ホスト社会に埋もれている日系人たちを発掘し、集結させる力もあるように思われる。また、最近の傾向として、日本人（ワーキングホリディ・ビザ取得者や留学生等）の参加者が増えており、観客としてはもちろん、ボランティアとして日系団体を手伝ったり、サークルに参加して公演に出演している者もいるようである。

第12表 パウエル祭への参加状況
(a) 年齢別

	参加する	しない	無回答	合計
10代	33	10	3	46
20代	6	3	0	9
30～50代	6	0	0	6
60代	8	2	0	10
70代	3	0	0	3
計	56	15	3	74

(b) 世代別

	参加する	しない	無回答	合計
一世	5	3	1	9
二世	33	10	0	43
三世	10	1	0	11
四世	5	2	0	5
不明	3	1	2	6
計	56	15	3	74

【個別回答】

- ・戦争で敵国となったために日本とアイデンティファイすることはなくなった。
- ・今日、仕事上の差別や民族孤立、言語の障壁もなくなって以前ほど日系社会の団結を強める必要がなくなった。日系カナダ人はむしろその自由とindividualism を享受しているように思える。民族外婚の増加もあって団結を強く保つほうが難しいのではないかな。
- ・日本人排斥運動の影響、強制収容の傷痕が日系人としてのアイデンティティを弱め、これがコミュニティの団結意志をも弱める結果となった。現在団結したコミュニティは存在しない。日系人としての誇りも失われているように思う。
- ・日系人は分散してしまったのでリーダーシップがなくコミュニティがなくなっている。恐らく新聞や機関紙が唯一日系社会の媒介であろう。
- ・パウエル祭は日系社会の団結を保つ役割を果たしているが、日系組織やクラブ、教会などはサポートがないぶん弱いコミュニティである。
- ・新移民のなかではコミュニティが存在するかもしれないが、日系カナダ人の中では強いコミュニティは存在しない。

ここでアンケートの結果から、パウエル祭への参加状況を見てみよう（第12表）。全体の参加率は75%と非常に高くなっており、年齢別、世代別に見ても、若者から老人まで、また一世（新移民）から四世まであらゆる年齢、世代の日系人が参加していることが分かる。ここから、パウエル

祭は特定の日系人たちによってではなく日系社会全体に支持されていると言うことができる。

パウエル祭の意義について考えてみると、①年配の日系人にとっては、次世代への文化継承と戦前日系社会（旧日本人街）の懐古をもたらす、②若者にとっては、日系文化の形成とコミュニティ活性化の機会であり、日系人同士の交流、文化の共有によってエスニック・アイデンティティを保持していく、③子供たちにとっては、日系社会に入り込むきっかけであり、コミュニティ活動に触れ、「日系人」としての自覚を生ませるという重要な場、ということが出来るであろう。

このように各世代によってパウエル祭の果たす役割は異なるとしても、あらゆる世代・年齢の日系人が一つのモノを創りあげることで、日系社会全体の団結が図られていると言えよう。パウエル祭は日系社会を凝集し、「日系人」としてのエスニック・アイデンティティを呼び起こし、あるいは強化する役割を果たしている。以上から、戦前パウエル街で過ごした二世にとっては、パウエル祭よりもパウエル街自体にエスニック・シンボル性が見いだされ、若者にとってはパウエル街という空間そのものよりも、現在そこで行われている事象—パウエル祭—にエスニック・シンボル性が見いだされるという結論に達する。

おわりに

最後に、今後の日系社会の行方について考えてみたい。リドレス合意によるエスニック・アイデンティティの確立、日系コミュニティセンターの誕生など、コミュニティ活性化の勢いに乗って、当分の間日系社会は存続するというのが私見である。日系社会の課題である新移民との融合に関しても、日系社会の上層部（日系組織のスタッフなど）や若者たちの間では既に両者の相互作用が日常化しており、それは時間の経過につれてコミュニティ全体に浸透していくであろう。また、若者たちが「自分たちが中心となって日系文化を支えていかねばならない」とコミュニティに対して積極的な態度を示していることから、将来、このような人々によって日系社会のリーダーシップが発揮されていく限り、日系コミュニティは消滅しないと思われるのである。

謝辞

本研究のために、貴重な情報と資料を提供して下さったバンクーバーの日系カナダ人の皆さん、特にアンケートに回答くださった日本語学校の皆さん、先生方、「隣組」のお年寄りの皆さん、スタッフの方々、JCCA並びにJCNM&ASの皆さん、UBC 日加交流会のメンバーの皆さん、そして、個人的にお話を聞かせてくださった Mr&Mrs. Fujiwara, Mr&Mrs. Yoshimaru, ご助力と激励をいただいた Shane Foster氏, Michael Wilson教授, その他情報の収集に協力してくれた友人たちに感謝の意を表したいと思います。

また、本稿の執筆にあたってご指導くださった内田先生、熊谷先生をはじめとする地理学科の先生方、助手さんどうもありがとうございました。

注

- 1) 本稿では「日系カナダ人」を「日本民族を先祖にもつ全てのカナダ人」と定義する。カナダの国勢調査でも、属性「エスニック・グループ」は両親のエスニック・オリジンによって規定され、日系人は「Japanese-origin を持つ全ての者」として集計されている。
- 2) 「パウエルストリート」とは街路そのものだけではなく、日本人街の総称として呼びならわされている。本稿では「パウエル街」という言葉で日本人街一帯を総称し、特にパウエル街のうち具体的な街路名に言及する時に「カドバストリート」、「パウエルストリート」等と表記する。
- 3) ここで言う「日系人」としてのエスニック・アイデンティティとは、自分が日系人であるという積極的自己規定であり、「日本民族を先祖に持つ全てのカナダ人」という単なるエスニック・カテゴリーとしての日系人とは区別する。
- 4) Yさんは福岡県出身の一世で現在79歳。「隣組」でお会いし、お話を聞かせていただいた。
- 5) UBC 日加交流会とは、UBC（ブリティッシュ・コロンビア大学）の学生たちによるサークルで、日本からやってきた交換留学生たちと各種のイベントを通して交流を図っている。メンバーは日系人、交換留学生、カナダ人からなる。

- 6) JCNM&AS (Japanese Canadian National Museum And Archives Society) は、JCCA (Japanese Canadian Citizenship Association) から独立したもので、日系社会の写真や資料を収集し、市民や研究者がアクセスできるように保管している団体。
- 7) 「隣組」とは非営利の福祉団体で、ボランティアによって運営されている。主にお年寄りを対象としたサービスを行っており、内容は、お年寄りへのランチサービス、家庭訪問、介護、カウンセリング、法的相談、レクリエーション、文化活動、日本語・英語教育、特別行事など広範囲にわたる。
- 8) JCCA でも戦前の日本人街地図 (1941年) を作成している。それは当時住民であった人の記憶を手掛かりに再現しており、各ブロックに番地と居住者名、商店名等が記載されたものである。具体的な商店名、居住者名を知るにはとても便利であるが、今回は日系建物数やその内訳を視覚的に捉えなかったので新たに地図を作成することにした。
- 9) この資料には2、3問題がある。一つは、住所録の記載方法が住人の名前によるものと建物の名前によるものとがあり、後者の場合その建物が日系人の建物であるかどうか判断出来ないこと、二つ目は、地図と住所録制作時期にずれがあり、地図上と住所録上の建物が一致しないということである。地図と住所録の記載がズレている場合は基本的に“Fire insurance map”に従ったが、それが日系人の建物であるかどうか不明な場合、無記入にした。従って、実際の日系人の建物は本地図で再現されている数よりもっと多いことが予想される。
- 10) この記述が何年に調査されたものかは不明である。
- 11) これらは日本の名の付く建物の数である。従って、実際の建物を確認することが出来なかった中で、中には日系人の所有でないものがあることも考えられる。
- 12) 当年のパウエル祭の参加状況に関するデータがなく、詳しい参加人数・参加者内訳は分からないが、10年前 (1987年) は「二日間で約15,000人が参加し、来賓として総領事、市長、国会議員、市会議員など多数出席した」(宮田, 1986) とあり、かなり大規模に行われていたことが伺える。
- 恒雄編『文化人類学2』アカデミア出版会, 8-17.
綾部恒雄 (1993) : 『現代社会とエスニシティ』弘文社, 300.
綾部恒雄 (1994) : 『文化人類学事典』弘文堂, 103.
江淵一夫 (1985) : 『エスニック・バウンダリーとステイグマーニュー・エスニシティの視覚』綾部恒雄編『文化人類学2』アカデミア出版会, 20-33.
江淵一夫 (1988) : 『ウクライナ系カナダ人のエスニック・アイデンティティ保持機構—アルバータ州エドモントンの調査から—』綾部恒雄編『カナダ民族文化の研究—多文化主義とエスニシティ—』刀水書房, 171-224.
北川直美 (1986) : 『日系カナダ人三世のコミュニティ参加とエスニシティ』カナダ研究年報, (日本カナダ学会), 第7号, 98-105.
工藤美代子 (1983) : 『写真妻』ドメス出版, 194.
倉田和四生 (1983) : 『カナダにおける日系社会の構造と変化』関西学院大学社会学部紀要, 47巻, 83-104.
今野敏彦・藤崎康夫 (1986) : 『移民史Ⅲアメリカ・カナダ編』新泉社, 419.
佐々木敏二・下村雄紀 (1994) : 『戦前のヴァンクーヴァー日本人街の発展過程』神戸国際大学紀要, 第46号, 26-67.
新保満 (1975) : 『石をもて追われるごとく—日系カナダ人社会史』大陸時報社, 327.
新保満 (1980) : 『日系カナダ人社会の変動—歴史・現状・展望—』カナダ研究年報, 2号, 日本カナダ学会, 178-192.
新保満 (1986) : 『カナダ日本人移民物語』築地書館, 330
新保満 (1989) : 『カナダ社会の展開と構造』未来社, 257
杉浦直 (1987) : 『エスニック・ソサイエティ・カリフォルニアと日系人社会の発展』地理, 32巻11号, 57-65.
杉浦直 (1991) : 『日本人社会と民族的組織』地理, 36巻5号, 41-47.
杉浦直 (1996) : 『シアトルにおける日系人コミュニティの空間的展開とエスニック・テリトリーの変容』人文地理, 48巻1号, 1-27.
高村宏子 (1990) : 『カナダにおける日系人補償の経過と背景』カナダ研究年報, 10号, 日本カナダ学会, 70-85.
富田登 (1988) : 『日系移民の民俗文化』綾部恒雄編『カナダ民族文化の研究—多文化主義とエスニシティ—』刀水書房, 271-296.

【文献】

綾部恒雄 (1985) : 『エスニシティの概念と定義』綾部

- 馬場信也 (1989) : 『カナダ—二十一世紀の国家—』中公新書, 246.
- 星野命 (1985) : 民族的帰属意識—エスニック・アイデンティティの任意性. 綾部恒雄編『文化人類学2』アカデミア出版会, 34-45.
- オマツ, マリカ. 田中祐介・田中テアドリ訳 (1994) : 『ほろ苦い勝利—戦後日系カナダ人リドレス運動—』現代書館, 270.
- 真壁知子 (1983) : 『写真婚の妻たち』未来社, 184.
- ミキ, ロイ・コバヤシ, カサンドラ佐々木敏二監修, 下村雄紀・和泉真澄訳 (1995) : 『正された歴史—日系カナダ人への謝罪と保障—』つむぎ出版, 167.
- 森田勝義 (1986) : 『パウエル街物語—カナダで暮らした60年—』ライブカナダ, 319.
- 吉田健正 (1992) : カナダの民族問題. 地理, 37巻10号, 47-59.
- 吉田忠雄 (1993) : 『カナダ日系移民の軌跡』人間の科学社, 319.
- ライツ, G. ジェフリー. 倉田和四生・山本剛郎訳編 (1994) : 『カナダ多民族社会の構造—エスニック集団はなぜ存在するか—』晃洋書房, 415.
- Adachi, Ken. (1976) : *The Enemy That Never Was A History of Japanese Canadians* McClelland & Stewart, 357.
- Barry, Broadfoot. (1977) : *Years of Sorrow, Years of Shame* Doubleday & Company Lnc, 370.
- Japanese Canadian Centennial Project (1978) : *A Dream of Riches—The Japanese Canadians 1877-1977* Vancouver & Drednaught, 190.

[資料]

- 門田チャールズ (1996) : 『二世へのチャレンジ 私たちは失われた世代なのか!』バンクーバー新報, 2月15日.
- Census of Canada (1991)
- Fire Insurance Plans (1930) : Guarantec Advisory Organisation.
- Horie, Michiaki. (1994) : "Challenge For Inter culutural Couples" The Greater Vancouver Japanese Immigrants' Association.
- Kobayashi, Audrey. (1996) : A Brief History of the Canadian Nikkei. Japanese Canadian National Museum & Archives Society, Nikkei Images.
- WRIGLEY'S BRITISH COLUMBIA DIRECTORY (1927, 1994) : Vancouver City Archives Library.